

# 炭鉱企業におけるスポーツの展開（そのⅠ 導入期） ——北海道炭礦汽船株式会社の事例——

Early History of Sports in Japanese Colliery Companies (I)  
—— History in Hokkaido Colliery and Steamship Company ——

畠 山 孝 子  
Takako HATAKEYAMA

## I 研究目的

炭鉱地域には、地底奥深く命懸けで働く特殊な労働環境や、炭鉱企業が地域の生活を丸抱えする特異な生活環境があった。しかし、このような生活環境であればこそ、そこに住む人々の間には「一山一家」の強い連帯感や、地域や仕事への強い愛着が築かれていったといえる。このような炭鉱という特殊な環境下においてスポーツ活動もまた、特殊なかたちで展開されていたことが考えられる。

ところで、北海道開発と共に発展を遂げた、炭鉱企業である北海道炭礦汽船株式会社（以下北炭と略す）は大正初期から昭和にかけて、スポーツが盛んな企業であった。そこで本研究では、北炭が、その城下町と言われた地域を中心に展開したスポーツ活動の実態を明らかにする。今回は、スポーツが炭鉱企業に導入された経緯を中心に、炭鉱という特異な環境で、スポーツはどのような意義をもって実施されたかを検討する。

## II 研究方法

### 1 資料調査

史料は、1939年発行の『北炭五十年史』および1958年発行の『北炭七十年史』を使用した。それぞれの稿本（三井文庫所蔵）も適宜参照した。北炭発行の社内機関誌は、北海道立図書館所蔵の企業社内報「社友」および夕張市石炭博物館所蔵の機関誌「炭光」を主な物とした。尚、両誌の欠番は注に示した<sup>注1, 2)</sup>。

表1には両誌の概要を示した。「社友」は北炭職員層向けに1923年創刊、1944年まで発行された社内報である。主な掲載内容は、会社の人事、炭鉱技術についての国内外の情報、関連論文、各炭鉱・営業所関係便り、芸術文化等であった。

「炭光」は、1928年創刊、1978年まで毎月1回発刊されたが、戦時中、発行は中断され、1950年再刊されている。戦前の「炭光」は鉱員層向けに発行された。掲載内容は、「青年団一夜講習会」「相互修養会」「修養団女子講習会」「思想善道講習会」などである。また、「天物謝恩通

表1 「炭光」及び「社友」概要

機関紙名		炭光	社友
発行期間		1928年～1945年 (1950年～1978年)	1923年～1944年
配布対象 (発行年従業員数)		労務者層 (14,068人)	職員層 (1,950人)
発行 主旨	五十年史 (1939年発行)	思想善導の目的を以って労務者本位の新聞 (p.254)	会員相互の研究発表及び知識の交換に資する (p.228)
	七十年史 (1958年発行)	当時全国的に蔓延しつつあった矯激思想を排除し、思想善導を資するために創刊されたもの(略)現在は職鉱員にくまなく配布 (p.418)	社友会において発行した機関誌「社友」があり、論文、研究発表、紀行、所感などを掲載し好評を博した (p.419)
形式(およその頁数)		新聞(8頁)	冊子(30頁～135頁)
発行状況		毎月二回	毎月一回
掲載内容		講習会(青年団、修養団、思想善道、女子)公演会、表彰、一心会関連記事、友子行事関係、災害防止、各鉱通信、健康保険組合会関連記事、詩・和歌・料理・マンガ等	国内外の論文・研究発表、紀行、所感人事、炭鉱技術情報、各炭鉱・営業所関係便り、芸術文化等
運動・スポーツ関連 掲載内容		運動部行事、各スポーツ大会結果、陸上競技教示、スキー講座、運動会、運動施設等	各鉱運動部行事(各鉱・営業所便り)、社友会主催大会結果、大会観戦記、剣道の話(連載)等

俗公演」「国民の精神的一致」などを演題とした公演会の記事、「友子行事関係」「災害防止について」「健康保険組合会関連」記事、詩・和歌・料理・マンガなどであった。

## 2 聞き取り調査

北炭関係者への聞き取りは随時行った。このなかで、北炭関係の写真および資料の提供を受けた。聞き取りの内容は記録すると共にテープレコーダに録音し、後にテープを起こし、編集を施した。聞き取りは、対象者によっては、数回におよんだ。電話での質問で内容の補足・確認も行なった。また夕張市石炭博物館館長、夕張ソフトテニス連盟会長、夕張図書館館長、三笠博物館館長からは、貴重な助言を受けた。

## Ⅲ 北炭のスポーツ

### 1 北炭の歴史概略

明治維新以後、北海道開発政策は、政府の近代的資本主義への移行期の経済的意図によって資源の開発に着手した。米国人ホレス・ケプロン、地質学者ベンジャミン・スミス・ライマンらの協力により、大鉱山が相次いで発見された。

炭鉱については、すでに明治以前から採炭が行われていたが、明治新政府は、北海道の幌内炭鉱を開鉱した。しかし、こうした官営事業は、効率性、収益性の面で行き詰まりをみせ、漸

次民間へと払い下げられた（1880年「工場払下概則」）。官有物払下に関しては問題も少なくなかったが、これら困難を乗り越え、1889年11月18日、堀基によって北海道炭礦鉄道会社（1906年、北海道炭礦汽船株式会社に社名変更）が設立された。同年には、鉄道の運輸営業及び幌内、幾春別両鉱の採炭が開始された。翌年、夕張採炭所を設置、北炭は空知・夕張の開坑を皮切りに、室蘭線ほか空知・夕張支線を完成、小樽港々頭設備の改良と海外貿易の振起、原野の開発などを手がけていった。この他、製鉄を兼営し、製鋼にも進出した。しかし、1909年以降「日露戦役の反動不況」（五十年史, 1939, p.66）「鉄道国有化後の財界不況」（五十年史, 1939, 序 p.2）により社務の整理を余儀なくされた。この北炭の難局時に團琢磨が取締役会長に就任し、抜本的な大改革を断行する。團は「革新的経綸を施すに足る真人物を物色の結果、…略…三井物産株式会社ロンドン支店長磯村豊太郎に白羽の矢を立て」（五十年史, 1939, p.76）、1913年「次で磯村豊太郎の専務取締役就任と共に諸般の革新策を具現し」（五十年史, 1939, p.72）北炭は更正を果す。

「わが社70年の歩は、そのまま北海道開発の歩である。」（北炭七十年, 1958, はしがき）と称されるように、北炭は北海道開発と共に発展を遂げる。しかし、創立から106年を経た1995年2月、東京地裁に会社更生法の適用を申請し、事実上倒産する。

## 2 北炭の福利厚生

### (1) 炭鉱企業の福利厚生

2001年11月29日、日本に残された2つの炭鉱の一つ池島炭鉱が閉山した。地域の基幹産業であった炭鉱に、地域は丸ごと依存していた。「炭鉱は無料で水道を、格安で電気を供給、住宅や病院、スーパーまで維持してきた（北海道新聞, 2001. 11. 29）。」従業員確保、定住策としての環境整備は、裏を返せば、炭鉱地域特有の企業丸ごと依存の生活であり、このような炭鉱地域特有の生活環境は、当時の北炭も今日の池島も、大きな違いはない。

炭鉱地域の多くは市街地から離れた山間地帯に広がる特異性から、炭鉱企業は特に福利厚生施設の充実に力を注いだのである。北炭も職員・鉱員の定住策として、福利厚生に力を入れた。五十年史の稿本には、鉱員の移動防止策が次ぎのとおり記されている。

#### 移動防止策

- 一、家族持の雇用
- 二、養成現場の設置
- 三、福利厚生 of 拡充

「…略…物質的・精神的に労務者の福利増進に全力を傾倒し来れるが、これを楯の反面より観る時は、労務者移動防止に対する適策として最大効果を挙げつつあるものなり。

即ち社宅、寄宿舍、病院、浴場、分配所等労務者に日常生活に密接の関係を有す

る諸施設の完備は勿論、子弟の教育、慰安、娯楽、体育及智育の向上、保健衛生を初め…略…」

#### 四. 退職手当制度の設定

#### 五. 農耕地の普及

（五十年史稿本第九編，従業員第二部，中巻，第一次稿本，1938，p.45～p.49）

なかでも福利厚生はの拡充は、労務者の定住策として最も効果をあげると述べている。また、その具体策の1つに「体育の向上」をあげている。

七十年史もまた、次のように記す。

当社は、石炭鉱業の特異性に基づき、労働力の維持培養をはかるため、古くから福利厚生施設の整備に意を注ぎ、その運営においても、すでに昭和六年九月の一心会結成以来、労資協力を建前とし、こえて十一年十一月には支店に福利部を設けてその完璧を期するところがあった。とくに戦後は、労働環境の改善、生活文化の向上策として、一段とその拡充をはかり、広範な分野にわたって、めざましい進展をとげるに至った。

したがって、福利厚生関係費は膨大額にのぼり、各鉱業所の三十二年度分についてみれば、社会保険料の会社負担金その他をふくめ、月額二億四千万円、トン当り七百八十五円との数字を示し、従業員一人当り月額において、一万三百四十五円にのぼっている。すなわち、社宅、合宿、寄宿舍などの居住施設の建築貸与はもちろん、分配所扱の日常生活物資の廉買、焚料炭、電力などの自家供給、会館、クラブ、集会所、体育スポーツ施設から、多くの娯楽機関、または社営病院および診療所、浴場、水道など、保健衛生施設の設置運営に至るまで、あらゆる生活分野にわたって福利施設が完備されている。

（七十年史，1958，p.420）

市原氏はその著『炭鉱の労働社会史』の中で、「1920年代には大手炭鉱で労務管理施策の大幅な拡充がなされた。それらの労務管理施策の特徴は、鉱夫たちの生活環境の改善と福利施設・教化活動の充実にその重点がおかれたことにあった。」（市原，1997，p.133）と述べている。生活丸抱えの福利厚生は、炭鉱企業特有のものといえる。

## (2) 北炭のスポーツ施設

北炭の福利厚生施設、とりわけスポーツ施設は早くから設置が進められていた。五十年史は次のようにスポーツ施設の充実に伝えている。

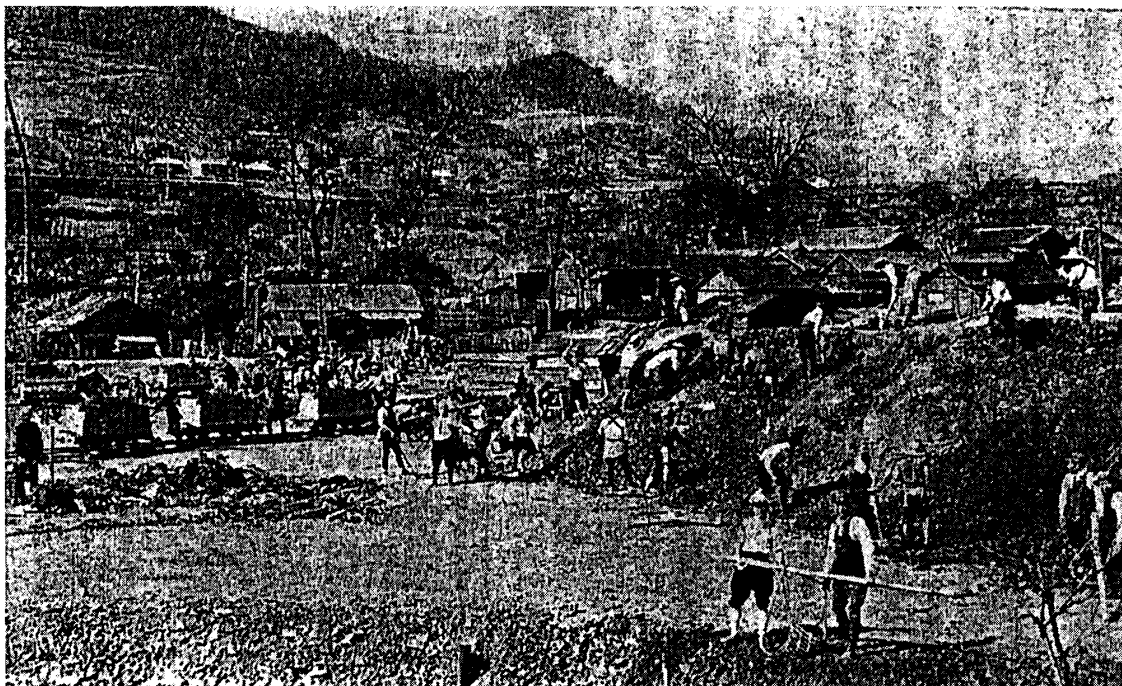
運動場は各鉱に其設けありて、会社主催の運動会を始め、青年団、少年団、小学校又は軍人分会等に盛んに利用されつつあり。運動会は1917年以降会社主催の下に毎年実行せるが、

1931年一心会の成立以後は、同組合福利部の主催下盛大に挙行され、従業員及び家族の慰安並びに体育の奨励に資せり。(五十年史, 1939, p.250)

また、「1928年には北炭最初の『本格的なグラウンド』が、夕張鉱において従業員の勤労奉仕によって新設され」と七十年史稿本土木編(1958, p.32)は記している。1929年の「炭光」には新夕張鉱で行なわれた運動場開拓工事の記事を見ることができる。資料1は、当時の「炭光」に掲載された写真である。「百人以上の人の美しい汗愛の奉仕が行なわれて居る」(炭光, 1929, 7, 1)と説明が添えられていた。同年10月の「炭光」には、真谷地鉱ではプール開きが行われ記事が載っている。また、当時、各鉱において運動会を始め、野球、卓球、庭球<sup>註3)</sup>、武道、スキー、スケート、弓道、相撲、陸上競技等の競技会の実施が両誌によって報じられている。この頃から、これらスポーツの競技会開催の為の施設・設備が整備されていたことを裏付けている。

また、現在「夕張鹿鳴館」として蘇った、当時の鹿の谷クラブに代表される各鉱のクラブには、テニスコート、卓球場、ビリヤード場などが整備されていた。昭和初期の幹部職員住宅地域にはテニスコートが付設されていた(畠山, 2002)。聞き取り調査の中では、「幌内炭鉱ではテニスコートは高級職員住宅地域に設置され、われわれは近づくことはできなかった」と語ってくれる人がいた。

北炭は炭鉱地域における従業員の生活環境を整備し、定住と労働力の培養を図ってきた。特に磯村就任後、福利厚生施設の充実が進められた。その中でスポーツ施設の整備が図られ、スポーツ活動が盛んに展開された。このような炭鉱地域特有の生活環境整備が、北炭スポーツの



資料1 新夕張鉱における運動場新設の奉仕作業を伝える

「炭光」昭和四年七月一日

普及をより一層促進したと考えられる。

### 3. スポーツ導入と磯村豊太郎

当時の従業員組織の1つは、「社友会」、今ひとつは「一心会」である。社友会は「社員の品位陶冶，体位向上，協和親睦」を目的とした職員組織である。一心会は「社員および労務者選出の委員と会社側委員によって構成され，就業面，生活面のいっさいの事項を協議する」組織であった。何れも，当時の常務取締役磯村豊太郎の発案によって，1919年に創設されものである（五十年史第九編従業員下巻，第一次稿本，1938，P.258）。

図1に示すように，社友会には「修養部」「体育部」「娯楽部」が置かれ，体育部は各種スポーツ活動を奨励した。「社友」は社友会の機関誌として発刊されたもので，体育部主催のスポーツ大会を数多く載せている。一方の一心会には4つの各部が置かれ，福利部では運動場の設置及び各種スポーツの奨励が行われた。

磯村豊太郎は，福沢諭吉の門下生で慶応義塾に学んだ後，三井物産株式会社ロンドン支店長を務め，1913年経営危機に陥っていた北炭に常務取締役として迎えられた人物である。1927年社長，1932年には会長に就任している。磯村の就任を契機として北炭のスポーツは社内に奨励され，大正期，昭和初期にかけて隆盛となった。

磯村は，経営危機に陥った北炭の建直しを図り，磯村の言う「我国屈指の炭鉱会社」に立て直す。磯村は就任の間に「労資共栄の原則を具現」「福利施設の完備医事衛生の改良」（『五十年史』，1939，序，p.2）を掲げた。磯村がスポーツに大きな関心を寄せ，北炭がスポーツ奨励に力を注いだことは，五十年史稿本が次のように伝えている。「尚ここに特筆すべきは我磯村会

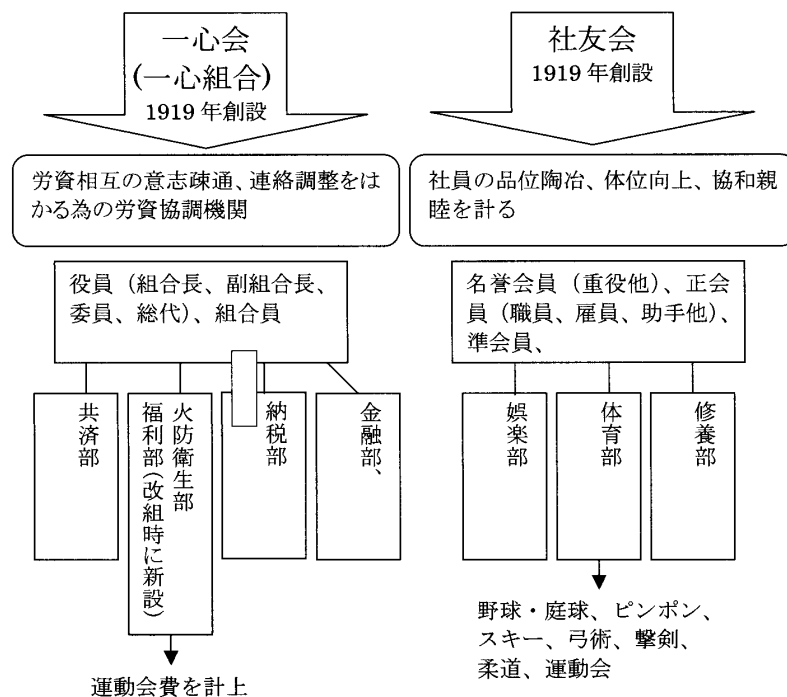


図1 「一心会」及び「社友会」の構成

長は特にスポーツに深き関心を持たれ、之が円満なる発達を念慮せられ、特に本会体育部に『磯村カップ』、『磯村刀』、『磯村弓』等を寄贈せられたるを以て、…略…」（五十年史第九編従業員第一部社員第一次稿本, 1938, pp.272-273）。このような磯村のスポーツへの関心が、「一心会」「社友会」のスポーツを取り入れた運営に色濃く反映したと考えることができる。磯村は、北炭内に重役名を冠とした各種大会を奨励し、スポーツ振興を積極的に推進した。社内報の伝えるように北炭内のスポーツ競技会は盛大に開催された。

ところで、近代テニスの日本への伝来は、明治初期とされる。この頃学校以外でテニスを実施した人物のひとりに、磯村の名があげられている（針重, 1931）が、筆者の調査から、磯村がテニス<sup>注4)</sup>をしたという記述には無理があることがわかった。これは磯村自身の筆による「私を語る」（「社友」に掲載）の記述から得た結果である。しかし、磯村がロンドン時代にテニス草創期を築いた人物の一人廣澤金次郎らと、テニスを実施したのは事実であった（畠山, 2004, pp.170-171）。磯村が北炭に就任後、企業にスポーツを導入した背景には、このような磯村自身のスポーツ経験があることは十分に想像できる。

#### 4. 北炭各鉦対抗争奪戦（重役カップ）

数多くのスポーツ競技会の中でも、北炭重役の名前を冠にした大会の開催は、北炭スポーツの一つの特徴といえる。当時開催された重役カップ戦の一覧を表2に示した。

北炭は、重役カップ戦をスポーツ種目ごとに設け、これを北炭各鉦対抗争奪戦の形式で実施し、企業内におけるスポーツの推進を図った。

表2 重役カップ一覧

1930～1945年までの役職（最高職）

柔道、剣道、弓道、銃剣道及び陸上競技には、社長・会長である磯村カップ、島田カップを設けた。資料2は磯村会長による「磯村弓」授与式の風景である。テニスは高城、赤羽、三国の3名の重役がカップを寄贈している。スキーの大会は高洲カップと呼ばれた。資料3はジャンプの大会風景、資料4は高洲杯である。また、野球は古谷杯（資料5）藤井・加藤杯であった。スポーツ大会は各鉦對抗の他、各鉦内大会も盛んであった。東京本店では、日比谷カップが

スポーツ種目名	開始年	役職	氏名	備考
柔道	不明	会長	磯村 豊太郎 島田 勝之助 (1940年より)	
剣道	1928年			
弓道	1927年			
銃剣道	不明			
陸上競技	1926年			
庭球	1923年	常務取締役	高城 規一郎	1942年野球 庭球島田会 長杯となる
	1931年	常務取締役	赤羽 克己	
	1937年	専務取締役	三国 庄二郎	
スキー	1928年	常務取締役	高洲 鐵一郎	
軟式野球	1938年	常務取締役	古谷 金一郎	
野球	1940年	専務取締役	藤井 暢七郎	
	1942年	専務取締役	加藤 徳行	
ゴルフ	1933年	取締役	日比谷平左衛門	

「社友」の記事を基に作成

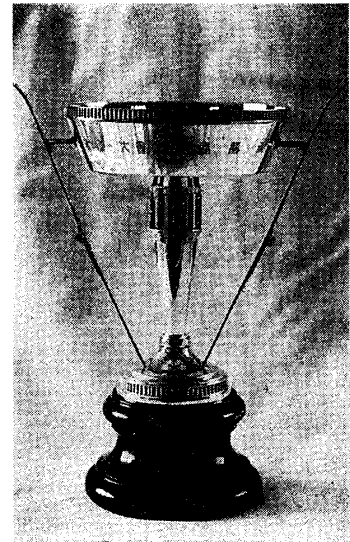
開催されていた（「社友」, 第十一卷第八号, p.38）。

重役カップは、盛大な表彰式を演出している。重役の手から、その杯を受けることは、最大の名誉であったと思われる。フェアプレイの精神に則ったスポーツ大会の開催は「労使共栄の原則を具現」の場であり、北炭側のスポーツ大会企画・運営のひとつの意図をそこにみることができる。

しかしながら、企業の意図とは離れてみていくと、スポーツ記事や関係者の聞き取りから、重役を含めた、その実施者一人一人のスポーツ関与の動機には、純粹に「スポーツの楽しさ」を求めて集い、スポーツを盛んにした実態を垣間見ることがある。例えば、戦後、スポーツ（特にテニス）に理解を示した重役として、関係者から名を上げられるF氏は、戦前東京から夕張へ転勤になった際（「社友」, 第十九卷第十二号, p.96）、「テニスラケットを背負ってきた」



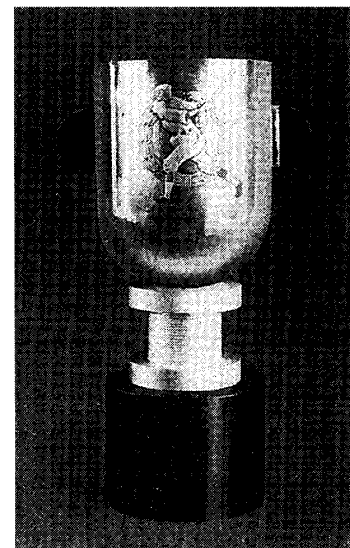
資料2 「磯村弓」授与式（「社友」第十三卷第八号）



資料4 高洲杯  
（「社友」第十四卷第三号）



資料3 第八回高洲カップスキー大会（ジャンプ）（「社友」第十三卷第二号）



資料5 古谷杯  
（「社友」第十五卷第十号）



と今も関係者が語るような人物で、夕張では、戦後スポーツの振興に大きな役割を果すのである。このように、理解ある上司の存在は、スポーツの盛んなヤマを築いた大きな原動力であったといえる。

### 5. 「炭光」「社友」のスポーツ記事の比較

前述表1に示した通り、「社友」について『五十年史』は「会員相互の研究発表及び知識の交換に資する為めに」とその目的を記し、『七十年史』は「論文、研究発表、紀行、所感などを掲載し好評を博した」と述べている。「炭光」について『五十年史』は、「昭和三年九月思想善導の目的を以て労務者本位の新聞『炭光』を発行し今日に及べり。」(1939, p.254)と記している。『七十年史』は、「主として鉱員を対象に刊行されていた。戦争末期、用紙の入手難によって休刊をよぎなくされたが、昭和二十五年四月復刊となり今日におよんでいる」とし、「現在は職鉱員にくまなく配布し」(1958, p.418)と戦前と戦後の配布先の違いについて述べている。

「社友」は職員層を、戦前の「炭光」は鉱員層を対象に発行され、配布対象者の差別化が行なわれていたが、職・鉱員層それぞれのスポーツ実態を伝えていることには違いはない。むしろこうしたことは、各階層間におけるスポーツの差を映し出していると考えられる。そこで、このことに着目し、ここでは、それぞれに掲載されたスポーツ記事の比較を試み、検討を進めたい。

資料7は磯村賞の陸上競技並武術大会を伝える「炭光」記事である。「炭光」のスポーツ関連記事はこのような写真入りの記事



資料7 磯村賞の陸上競技並武術大会記事及び各鉱通信欄 (「炭光」昭和八年十一月一日)

（上段）から、各鉱通信欄内の100字程度の記事（下段）まで様々であった。このほかには陸上競技教示の連載、イラスト入りのスキー講座などが掲載されていた。同じく資料8は「社友」発行年7月号に載った、北炭最初の重役カップ戦である、テニスの「第一回高城カップ」を伝える記事である。「社友」には、このほかに、「大会観戦記」、「剣道の話」の連載などがあった。また、各鉱便り欄には、各鉱ごとスポーツ行事を簡単に紹介した記事が載せられていた。

図2は、すべてのスポーツ関連記事の掲載件数を、種目ごとにまとめてその比率を示したものである。「炭光」の掲載件数は武術・武道、陸上競技、野球、運動会、スキーの順に多く、「社友」は野球、スキー、武術・武道、庭球の順であった。野球、武道・武術、スキーは両誌とも多く扱っていたが、庭球は「社友」が多く扱い、陸上は「炭光」が多く扱ってきた。このように両誌のスポーツ種目の取り扱いには相違が見られた。

庭球の「社友」での扱いは、全試合の経過を10ページにわたり記載した1924年の記事に代表されるように、大会の内容を詳細に伝えるものが多かった。また、これらの記事には「社友会行事中最も期待されるこの大会」（社友、1926、第四卷第八号、p.50）「鹿ノ谷の年中行事の随

### 高城カップ第一回庭球大会戦績

大正拾貳年七月八日（第二日曜日）

前後	礦名	氏名(選手)	勝敗	礦名	氏名(選手)	勝敗
前後	第一回	山藤	×××	林坂	田丸	○○○
前後	第二回	武藤	×××	松本	丸上	○○○
前後	第三回	高橋	××○	藤本	井上	○○○
前後	第四回	米井	○×○	藤本	向中	○○○
前後	第五回	加藤	○×○	藤本	飯平	○○○
前後	第六回	伊藤	○××	藤本	飯平	○○○
前後	第七回	小川	○××	藤本	飯平	○○○
前後	第八回	中野	○×○	藤本	飯平	○○○
前後	第九回	佐藤	○×○	藤本	飯平	○○○
前後	第十回	佐藤	○×○	藤本	飯平	○○○
前後	第十一回	塚中	××○○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十二回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十三回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十四回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十五回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十六回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十七回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十八回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第十九回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十一回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十二回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十三回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十四回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十五回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十六回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十七回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十八回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第二十九回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○
前後	第三十回	飯平	○×○○	藤本	飯平	○○○

大争奪戦は開始す。  
第五回選より第五回の決勝戦に至る間各選手は妙技に次ぐに神技を以て数百千の大観衆と共に刻々白熱化する。支店軍は惜くも第五回選に枕を並べて討死する惨たる光景を呈す。夕張軍の奮闘甚だしく相並んで準決勝に至る長駱して戦線に参加したる浅春別嶺小林白坂組の力戦苦闘

三五

### 鹿之谷原頭の大庭球戦

「タカギカップ」争奪戦！光榮は夕張礦軍に支店社友會庭球部主催の社友會庭球大會は八日午前九時より鹿の谷支店社友會所屬コートに於て開催せらる。参加數、十チーム貳拾組。特に本年よりは常務高城工學博士より寄贈せられたるカップの争奪戦の事なれば各選手の意氣戦前既に白日の光を競ふ  
會場は社紋打抜の幔幕に覆はれ新装のスタンドは全く成り定刻高洲支店長の開會の挨拶に次で折から來道中の高城博士名譽會長として「スポーツマンシップ」の理想を高調せらる。赤井審判長の審判上に關する一場の注意の後空前の

は遂に夕張軍大將組平野飯田組を破り茲に松本大塚組と決勝戦に入る。兩軍虚々相蓋し會戰十數度遂に榮冠は夕張軍に落つ。銀色輝々たる「タカギカップ」は兩選手の手に移され北海タイムス社寄贈の賞牌又同選手の胸に輝く。狂熱せる應援團は選手を擁し遂に真原夕張礦長胸上の珍景を呈するに至る。閉會午後四時、戦績左の如し

資料8 高城カップ第一回大会を伝える記事（「社友」第一一年第七号）

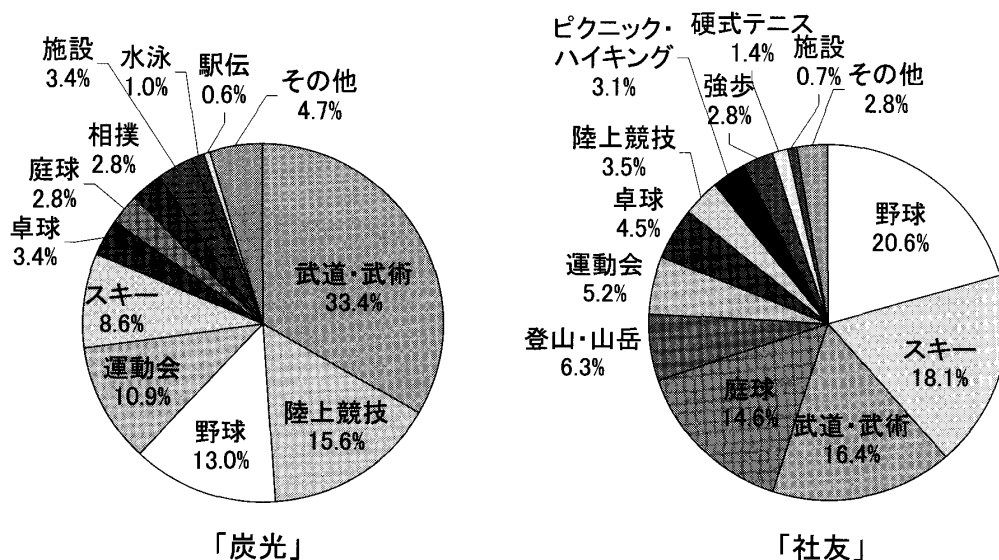


図2 「炭光」「社友」のスポーツ記事 掲載件数比較

一」(社友, 1927, 第五巻第7号, p.66)のような形容が数多く用いられていた。一方, 労務者層に配布された「炭光」ではテニスの掲載件数は少なく, その内容では1934年11月の記事が唯一写真入りのもので, 他は100字前後の簡単な大会報告であった。なお, テニスの詳細は「炭鉱企業におけるテニスの導入と戦前の展開」(畠山, 2003)において, すでに報告している。

テニスとは対照的に陸上競技は, 「社友」での取り扱いは少なく, 「炭光」で多く取り上げられていた。「炭光」は陸上競技教示を連載し, 郷土の誇りとして陸上競技のK選手(鉱員)の活躍を大きく伝えた。

武術・武道は, 「社友」での扱いに比べ, 「炭光」で多く取上げられ, スポーツ記事の3分の1を占めていた。

五十年史稿本(p186~p188)によると, 労務者養成所は大正5年夕張鉱において試験的に設置され, その後各鉱に設けられたとされる。この養成所の1938年の時間割では, 月曜から土曜の7時から8時の時間帯を運動に当てている。火・木曜日は武道, 他は体操となっている。資料9は採炭員養成所生徒による野試合風景である。これらの資料から北炭は労務者(鉱員)に対して, 特に武道を奨励したことが考えられる。

以上, 「社友」「炭光」の比較によって, 読者側からみると, 職員層は野球, スキー, テニスの関心が高く, 鉱員層は, 武道, 陸上競技, 野球への関心が高いことが示された。また「職員にはテニス, 鉱員には武道」といった扱いの特徴が見えてきた。職員層と鉱員層間に愛好するスポーツや, その実施に差異を認めることができた。北炭のスポーツは, 導入期から, 炭鉱社会の特殊な階層性が, スポーツ活動にも現れ, そのような環境の中で, スポーツが展開されていた様子を推察することができるのである。



資料9 採炭係養成所生徒による野試合（「社友」第十四巻第九号）

#### IV ま と め

北炭社内機関誌「社友」及び「炭光」並びに北炭年史等の企業内資料によって、北炭におけるスポーツ導入の経緯が明らかとなった。

大正初期、北炭は、経営再建のため磯村豊太郎を専務取締役役に就任させた。磯村はスポーツに強い関心を寄せる人物であった。磯村が、北炭再建の方途として上げた、「労使共栄の原則を具現」、「福利施設の完備医事衛生の改善」のなかで、スポーツ施設を含んだ福利厚生施設の整備を進め、スポーツ活動を奨励した。この頃から、重役カップに代表されるように北炭内のスポーツ活動は旺盛となった。これらスポーツ活動には、炭鉱社会の労働階層が反映されていた。

この研究は、平成16年度北海道浅井学園大学短期大学部特別研究費の助成を受け進められた。

#### 注

- 1) 本研究では北海道立図書館所蔵の「社友」を用いた。なお、欠号は次の通りである。第2年(第12号)<sup>(ママ)</sup>、第3巻(第3.4.9号)、第4巻(第2.3.4.6.7.9.10号)、第7巻(第5.6.10.12号)、第8巻(第1.2号)第11巻(第2.3.4号)、第16巻(第9号)、第18巻(第8号)、第19巻(第1.4.5.6.7.8号)、第20巻(第6.9.12号)
- 2) 本研究では夕張石炭の村石炭博物館所蔵の6号(1929年2月1日)から112号(1937年12月1日)を用いた。欠号は以下である。8.24.30.40.47.48.54.57.63.67.71.78.79.86.91.

92. 94. 97. 99. 102. 103. 106. 109. 110

3) 本論文で用いている北炭で実施された「テニス」「庭球」は、いずれも現在のソフトテニスをさしている。

4) 磯村が当時行ったとされるテニスは、現在の硬式テニスである。

### 引用・参考文献

針重敬喜（1931）日本のテニス．日黒書店

畠山孝子（2002）「炭鉱企業におけるソフトテニスの導入と戦前の展開―北海道炭礦汽船株式会社の事例―」．北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要．第41号．pp.25-40

畠山孝子（2003）「日本のテニス草創期における磯村豊太郎の動向」．北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要．第42号．pp.163-175

北海道新聞．2001.11.29：札幌

万仲余所治（1929－1937）北海道炭礦汽船株式会社炭光編集（1950－1978）「炭光」．北海道炭礦汽船株式会社北海道支店：夕張石炭の歴史村石炭博物館所蔵

北海道炭礦汽船株式会社資料課（1938）当社創立五十年史第九編従業員第一部社員（第一次稿本）

板橋守邦（1992）屈曲した北海道の工業開発―戦前の三井物産と北炭・日鋼―．北海道新聞社：札幌

市原博（1997）炭鉱の労働社会史―日本の伝統的労働・社会秩序と管理．多賀出版：

影山健他（1973）シリーズスポーツを考える．国民スポーツ文化．大修館書店：東京

木村毅（1978）日本スポーツ文化史．ベースボール・マガジン社：東京

前田一（1942）磯村豊太郎伝．北海道炭礦汽船株式会：夕張

増谷栄一（1996）昭和史北炭夕張炭鉱の悲劇．彩流社：東京

文部省普通学務局（1993）社会体育スポーツ基本史料集成第12巻．全国青年団之娯楽他．大空社：東京

七十年史編纂委員会編（1958）北海道炭礦汽船株式会社七十年史稿本第五部資料．北海道炭礦汽船株式会社

七十年史編纂委員会編（1958）北海道炭礦汽船株式会社七十年史稿本土木編．北海道炭礦汽船株式会社

七十年史編纂委員会編（1958）北海道炭礦汽船株式会社七十年史稿本勤労編下巻の一（自昭和13至同20）．北海道炭礦汽船株式会社：三井文庫所蔵

七十年史編纂委員会編（1958）北炭七十年．北海道炭礦汽船株式会社．尚，本書は七十年史と同時に刊行された写真を中心に編まれた資料である

七十年史編纂委員会編（1958）『北海道炭礦汽船株式会社七十年史』．北海道炭礦汽船株式会社

中村敏雄他（1978）スポーツ政策．大修館書店：東京

中山督（1939）『北海道炭礦汽船株式会社五十年史』。北海道炭礦汽船株式会社  
社友会（1923-1944）「社友」。北海道炭礦汽船株式会社：北海道立図書館所蔵  
等々力賢治（1993）企業・スポーツ・自然。大修館書店：東京  
夕張働くものの歴史を記録する会編（1977）わが夕張ー知られざる炭鉱の歴史ー